

No.44

2012 年 11 月 20 日

陸生ホタル生態研究会

電話 Fax: 042-663-5130

Em: rikuseihotaru.07@jasmine.ocn.ne.jp

HP: <http://rikuseihotaru.jp>

1 蛍みてあるき in タイ

(報告者) 平田秀彦、(同行者) 若杉和男

(1). あらまし

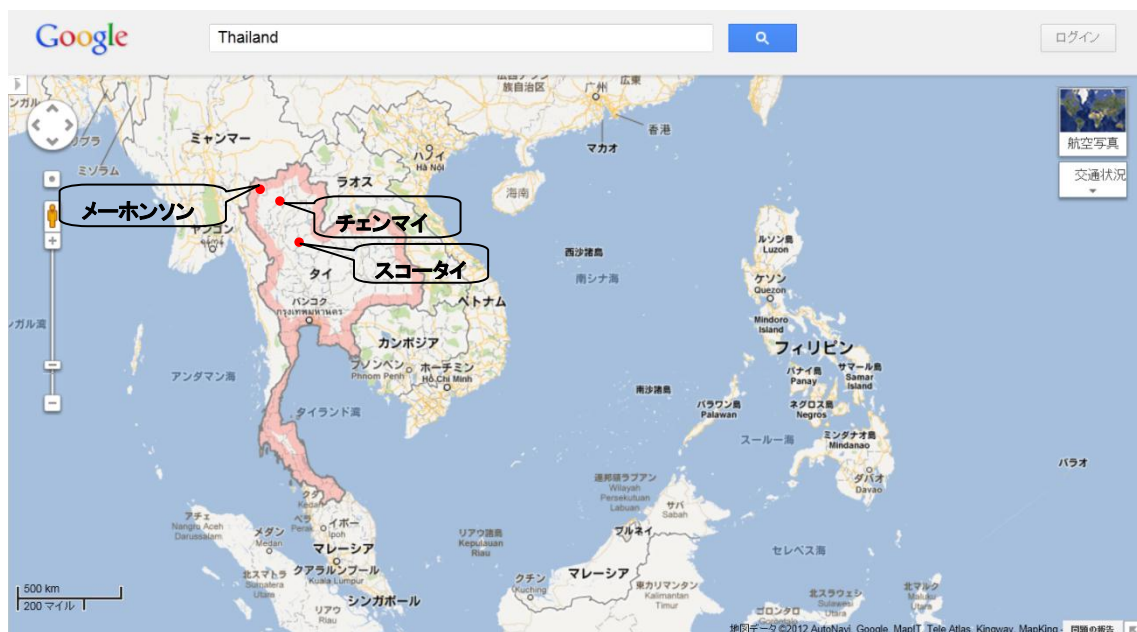
東南アジア、タイ王国でホタルを観る機会を得たのでまとめてみた。この報告は調査・研究とは凡そ縁遠い珍道中記であり、その上現地の方との会話が儘ならぬばかりか、準備不足も手伝って不正確・非科学的な記載があり、更にホタルと無関係の観光記事も混在することを先ずもってお断りします。

キッカケは 2010 年春。兵庫県立人と自然の博物館の八木剛主任研究員から「チェンマイに面白い昆虫館があるようです。訪タイするのなら、是非立ち寄ってみて」と言われた。

私達はその年の夏、梅林三重大名誉教授が企画する「七夕植樹祭」なる行事に参加する予定があり、早速その旨を梅林先生に告げたところ、延 14 年間のタイ在歴ある梅林先生は現地の蛍研究者と面談の上、以下に述べる「蛍ツアー」をアレンジされた。

訪れた先はタイ北部のチェンマイ県、メーホンソン県およびスコータイ県 (図 1)。

4 箇所ではホタルを観察し、一つの研究室を見学した (表 1)。



(図 1) タイ国マップ

(表 1) ホタル観察場所

	年月日	観察場所	観察した蛍
①	2010/7/5	(マーホンソン)	不明
②	2010/7/7	(チェンマイ) サンサーイ郡	<i>Luciola</i> 属
③	2010/7/8	(チェンマイ) QSBG ホタル研究室	<i>Lamprigera tenebrosa</i>
④	2011/7/10	(チェンマイ) QSBG 園内	
⑤	2011/7/11	(スコータイ) 旧市街、歴史公園内	<i>Luciola aquatilis</i>
⑥	2012/7/10	ワット プラ パイの南側に隣接する樹林	<i>Luciola aquatilis</i> <i>Luciola filiformis</i>

(2). 補足説明

(表 1) ①マーホンソン

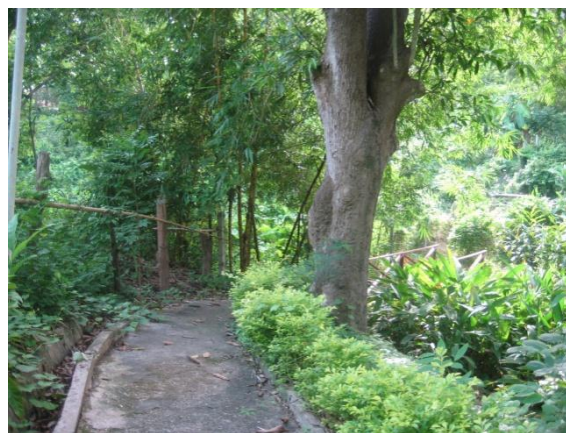
チェンマイの北西 350 kmのミャンマー国境に近いマーホンソンは第二次大戦時に敗走して来た多くの日本兵が眠る山岳の街。

住民の半分はミャンマーから入ってきたシャン族。寺院はビルマの建築様式。

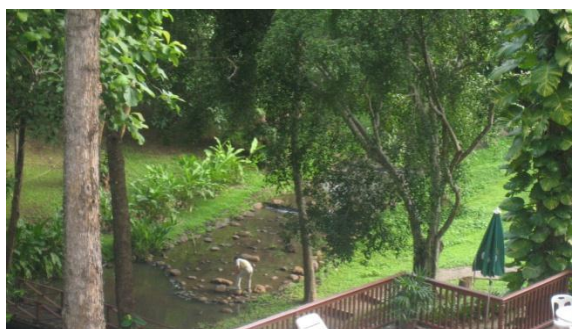
ホタルは宿泊した宿の裏庭で舞っていた。ひょっとしたら水生のホタルか？



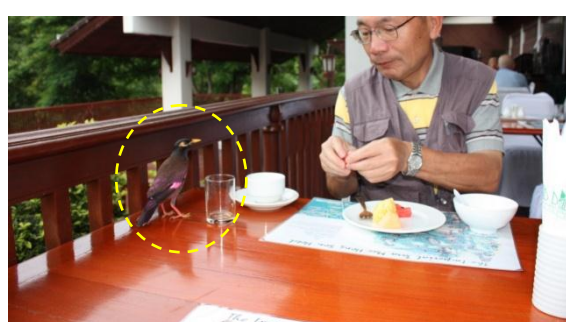
(図 2) 軽飛行機でマーホンソンへ



(図 3) ホタル生息地 (ホテル裏庭の遊歩道)



(図 4) 小川で貝を観察する若杉



(図 5) 朝食のテーブルへ野鳥がくる

(表1) ② チェンマイ・サンサーイ郡

チェンマイ中心街から北東へ約 20 km、メージョー大学近くの草原でホタルを観察。地上 2～3m の高さを強い閃光を発しながら比較的早い速度で飛ぶ。夢中で数頭を捕まえる。

案内してくれたのは昆虫学修士 Mr. Wirat Sommitr。氏は 2009 年まで、シリキット王妃植物園 (Queen Sirikit Botanic Garden。以下 QSBG と記す) で陸生ホタルを研究していた。今はスコータイ植物園 (Phramaeyaa Sukhothai Botanical Garden。以下 PSBG と記す) の所長。

Wirat 氏によると、このホタルは平地の水際の湿地に棲む陸生のホタル、孵化後 6 ヶ月で成虫になる (卵 7 日、幼虫 165 日、蛹 10 日、成虫 7 日) が発光飛翔のピークは 6～7 月。

下見もせず、初めて訪れた真っ暗なフィールドは所々に水溜りがあり、デコボコしているが足をとられるほどの泥濘みもない。草丈は低いが時々棘のある雑草が足に絡んでくる……どうやら田圃ではなさそうだ。

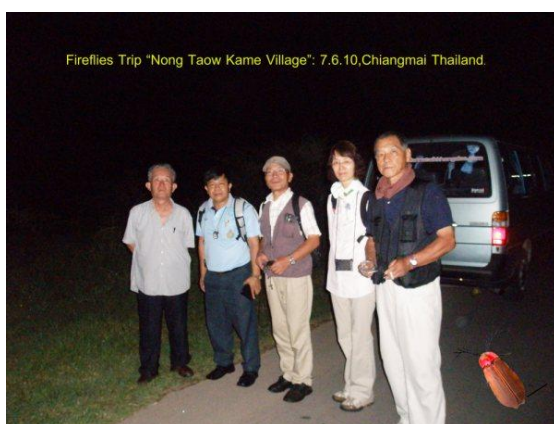
しかし、何となく様がおかしい。ブフツ・ブフツと聞きなれない音がする。目を凝らすとナ・ナント目の前に水牛がぬっと立っている。懐中電灯を向けると眼を爛々と輝かせて。どうやらここは水牛の放牧場らしい。



(図 6) ホタル生息地(Nong Taow Kame Village)



(図 7) 捕まえたホタル (標本作成・八木剛氏)



(図 8) 左から 2 人目が Wirat 氏
写真右下は Vesta 属。昼行性。



(図 9) そこは水牛の放牧地だった

(表 1) ③ QSBG ホタル研究室見学

QSBG はチェンマイ市の北西約 30 kmのドイステープ国立公園の一角にある。敷地は 1,000ha（一片 3 km強の正方形に相当する面積）。ここで 2008 年 8 月、ホタルの多様性と保護に関する第 1 回国際シンポジウムが開催されたとのこと。

QSBG が目指すところは無論、タイ国植物の研究・保護・教育助成だが、近年、昆虫分野にも展開し、昆虫関係で 10 人のスタッフと 3 つのラボを有し、昆虫標本数は 15,000 点にのぼる。

研究棟の一室には各種ホタルの写真パネルが展示され、別の実験室ではいくつかのホタルが飼育されている。なかでも懐中電灯に負けないくらいに強い光を放つ体長数cmの巨大なホタルには圧倒された。このホタル、ライフサイクルは約 14 カ月で幼虫の期間は 11 か月。又、実験室には餌として与える魚を飼育する水槽もあった。

園内のロックガーデンにはホタル観察用の小径が設けられており、この季節 5 種類のホタルを観ることができる。19 時半頃なら園内の車道を車で通過しながら光の舞を見ることができる箇所がいくつもあるようだが、この日は時間の都合で残念ながら叶わなかった。



(図 10) QSBG 園内



(図 11) Firefly Lab



(図 12) 実験室



(図 13) 実験装置



(図 14) 展示物



(図 15) 展示物



(図 16) 展示物



(図 17) 展示物



(図 18) 展示物



(図 19) 展示物

(図 20) 展示物



(図 21) ランプリゲラの強い連続光に息を飲む



(図 22) 国旗と王妃肖像の前で



(図 23) 参考写真・・・QSBG 園内で砂糖椰子を植樹するツアーメンバー・・・2012 年 7 月撮影

左の写真は「梅林正直三
重大学名誉教授と行く・第 12 回チェンマイ
七夕植樹祭」で企画され
た行事のひとつ。
梅林先生は十数年来、タ
イ北部で果樹植樹ボラ
ンティア活動をされて
いる。



(図 24) ステノクラディウスの幼虫がミミズにアタック (Wirat 氏撮影)



(図 25) そこへアリがやってきて三つ巴の戦い (Wirat 氏撮影)



(図 26) *Lamprigera tenebrosa*
(Wirat 氏撮影)



(図 27) Wirat 氏と情報交換

.....(表 1) ④..... QSBG 園内でホタル観察

観察途中で雨となり、飛翔する個体数も減ってきたが、チェンマイ大学昆虫学専攻の女子学生 3 人 (図 29) が捕虫網を持って走りまわって数頭のホタルを捕まえた。



(図 28) ホタル生息地 (QSBG 園内)



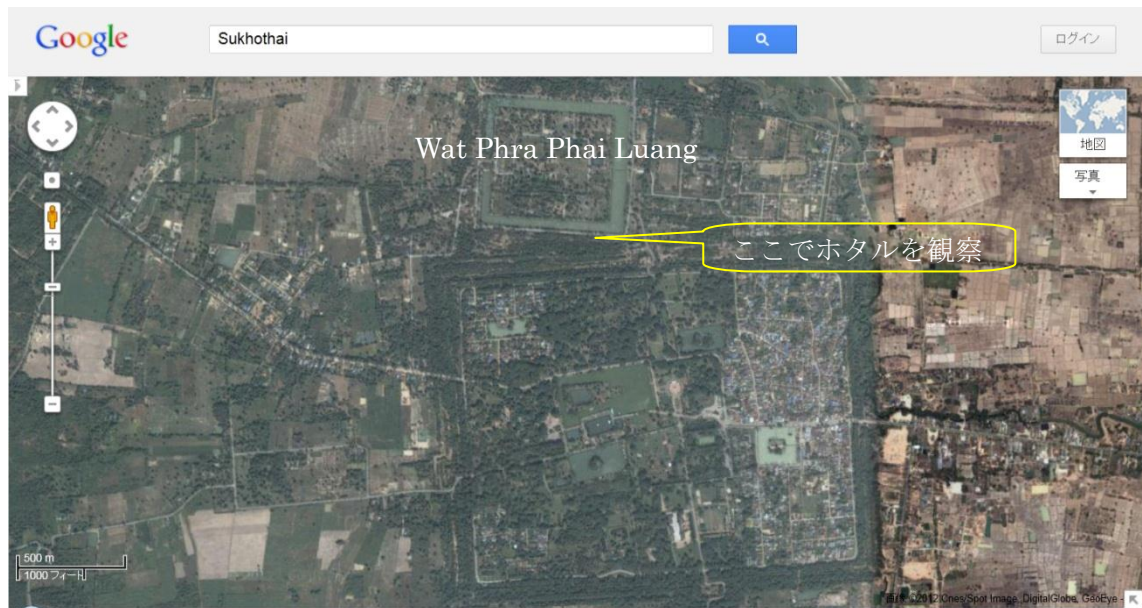
(図 29) チェンマイ大の学生と

.....(表 1) ⑤..... スコータイ

スコータイはチェンマイから南へ約 350 km (バンコクから北へ約 440 km)。13 世紀にタイ初の独立王朝としてラムカムヘーン大王が現在のタイの基礎を築いたかつての首都。

世界遺産の歴史公園でホタルが舞う。

この日、Wirat 氏は車を運転しながら窓から手を伸ばし、ホタルを捕まえるという離れ業をやったのけた。



(図 30) スコータイ旧市街にある世界遺産の歴史公園中心部



(図 31) ホタル生息地 (スコータイ)



(図 32) ワット・プラパイ・ルアン

(表 1) ⑥ スコータイ その 2

ホタルは地上数メートルの高さをかなりのスピードで飛んでいく。辺りが暗い所為か点滅する光もはっきりしている。持参した捕虫網で 1 頭をゲットした (図 34)。

仰げば満天の星。正に降るような。これ程までに白く輝く天の川にお目にかかるのは数十年ぶりか。子供の頃、確かにこんな夜空が田舎にあった。北緯 17 度から見る北斗七星はかなり地平線に近いが、それでもゴルフボールのように大きく見える光が煌々と・・・・今の日本では精々パチンコ玉ぐらいでぼんやり・・・・。ホタル以上？に感激した。



(図 33) *Luciola aquatilis*



(図 34) *Luciola filiformis*

(3). おわりに

Wirat 氏によると、タイ国に棲むホタルは約 40 種で、陸生と水生の割合は 10 : 2。チェンマイで成虫の発光が見られるのは 5 月から 7 月だけ。まだまだ不明な事柄が多いとのこと。

さて、ホタルのことをタイでは「ヒンホイ (hing hoi)」と言い、声調は↗↘。ヒンは「火」ホイは「吊り下げる」という意味らしい。

このツアーで東南アジア・タイ国の動植物の豊かさを再認識した。ホタル研究のますますの発展と新種の発見を期待します。田圃の広大さにも感動した。また、穏やかに光を運ぶ小さな虫を見守る仏教国の心の穏やかさをも覚えました。

「行った。見た。」と写真多用の拙い見聞録も、何処かで何かの折に情報交流のキッカケになれば幸いです。又、内容の間違いには厳しくご指摘の程お願い申し上げます。

最後に、梅林正直三重大学名誉教授並びに Wirat Sommitr 氏はじめお世話頂いた多くの皆様に深謝申し上げます。

以上

(4). 付録

ホテル観察の合間を縫って、次の2か所に立ち寄りしました。

4-1 Siam Insect Zoo (SIZ)

民営の昆虫館でチェンマイ県メーリム郡にある。オーナーはバンコクに住む虫好きのビジネスマン。蜘蛛、蝶、甲虫、ムカデ、サソリなどを繁殖・飼育・展示。虫に直に触れることができるように工夫されており、子供たちの校外教育や大学生のトレーニングにも利用されているようです。蝶の飼育ハウスも面白い。残念ながらホテルは少ない。



(図 35) ………



(図 36) ホテルの写真パネルと館内ガイド

4-2 The Museum of World Insects and Natural Wonders

チェンマイ市内、シリマンカラージャーン通りにある。オーナーはマラリア蚊研究者の老夫妻。こよなく自然を愛する二人はその偉大さなどを来館者と分かち合おうと、昆虫・貝・化石ほかを展示している。



(図 37) 展示の一部



(図 38) 中央は昆虫館のオーナー、
Dr. Rampa Rattanaarithikul

2 アルプス西穂高岳のベニボタル科クロバヒシベニボタル

(*Dictyoptera elegans*)



上掲の写真は、岐阜大学教育学部の川上紳一先生から今年の9月26日に送られてきたものです。先生が今年の夏に北アルプスに調査にお出でになった際に見付けたものだそうです。この種の分布は、本州と言われているが、北アルプス西穂高岳での採集記録はまだ無いようです。これが初見になるのではないのでしょうか。

3 あとがき

(1) 平田さんの報告

今回は、名古屋城のヒメボタル調査メンバーの一人、平田秀彦さんにタイのホタルを紹介していただきました。平田さんと若杉さんは数年前からタイになんどもお出かけになっています。そこで、事務局からお願いして今回タイのホタルの紹介をして頂きました。タイに行ったことのないものにとっては、大変興味深いお話です。特に驚いたのは、**孵化から6ヶ月で成虫になるホタル。牧場に生息するホタル。体長数センチで成虫の発光は懐中電灯かと思うほど明るく、幼虫の食餌が魚類というホタル。**

また、タイのホタルは現在**40種で、そのうち陸生と水生のホタルの割合は10：2という報告も注目されます。**世界には約**2000種**のホタルがいて、そのほとんどが陸生のホタルで、日本にゲンジボタル・ヘイケボタル・クメジマボタルと3種も水生のホタルが生息しているのは特例と言われている。しかし、**タイには現在40種のホタルがみつかつていて、10：2の割合で水生のホタルがいるそうなので、日本よりも水生のホタルが多く生息していることになります。**それらはどんなホタルなのか、平田さんにまたいつか書いて頂きましょう。なお、この報文の中に登場するミミズを捕食するホタルの幼虫の様子は若杉さんから、動画のCDを頂いています。タイの王立博物館の館長さんからいただいたものだそうです。動画でミミズの捕食をご覧になりたい方、事務局まで連絡下さい。ご要望にできるだけお応えします。

(2) お知らせ

44号に掲載する予定でお知らせしました、「折爪岳でのほたるサミット」報告、次号45号に掲載します。宜しくお願いいたします。(文責小俣)